

〈論文〉

『奥細道菅菰抄』と漢詩文(五)

塚越義幸

引き続き『奥細道菅菰抄』と漢詩文との関わりについて考察してみたい。

(四十) 別段 十二日平和泉と心ざし、あねはの松緒だえの橋など聞傳て署中雉兎菰薨の往かふみち署中石巻といふ漆に出

……雉兎菰薨ノ薨ハ、芻ノ俗・字ナリ。孟・子ニ

曰、文・王ノ之囿ハ、方七・十・里、芻・薨ノ者モ往キ焉、雉・兎ノ者モ往ク焉、趙・岐カ註ニ、芻・薨ノ者ハ、取ルノ芻・新ヲ之賤・人也。ナリ雉・兎ノ者ハ、獵・人取ル雉・兎一者也ト云リ。此コニ雉・兎芻・薨ノ行カフ道トハ、言ハ唯ダ草カリ木コリ獵リ人ナドノ往・来スル野道山道等ニテ正シキ往・還スデニアラザルヲ云……漆ハ、湊ノ字ノ誤ニテ、湊ハ、

正・字・通_ニ水・會也ト註ス……

この注では、五月十二日に瑞巖寺から平泉を目指す途中に、「あねはの松」や「緒たえの橋」などの歌枕を尋ねて行くうちに、「雉兎芻蕘」（獵師や木こり）の往来するような道に入り込み、道に迷ったりしてようやく石巻の港に出た場面、特に「雉兎芻蕘」と「漆」の語釈を示した。

まず、「雉兎芻蕘」は「芻」が「芻」の俗字であることを明らかにしつつ、その典拠として『孟子』を挙げ、さらにその趙岐の注も示している。⁽¹⁾ この話は、『孟子』梁惠王下に見えるもので、

周の文王の庭園は、七十里四方もあったが、草刈りや木こりが出入りしていたし、雉や兔を捕る獵師も出入りしていた。

という本文に対し、趙註が「芻蕘」は干し草や薪を刈る賤しい人であると、また「雉兎」は獵師で雉や兔を捕まえる人であると示した。

これらから、梨一は「雉兎芻蕘も行きかふ道」を「ただ草刈り・木こり・獵師などの行き交う野道山道で、正規のルートではない道筋である」と解釈した。

次に、「漆」の語注として、「漆」が「漆」の誤字とし、『正字通』已集水部の「水會」の意味を採用して、「川と川の合流点」であると解釈している。

この注は、『鈔』では、「雉兎芻蕘」は、

孟子梁惠王下篇 註_ニ云 芻_ハ草也蕘_ハ薪也 草刈木こり也

となっており、『菅菰抄』と同様『孟子』梁惠王下が挙げられているが、注は趙註ではなく朱子注である。⁽²⁾ 一方『鼈頭本』では、

○雉兎芻蕘 チト スウギヤウ 雉兎ハ獵人也 芻蕘ハ山賤也。此往かひ道也

と示しているが、『孟子』の書名は出されていない。それに対し「漆」の注はともに見られない。

(四十二) 三代の榮耀一睡の中にして器中秀衡が跡は田野に成て金鶏山のミかたちを残す

……一睡のうちにしてとハ、中・華ニテ、富・貴ヲ願タル旅・人ニ、呂・洞・賓ガ一ツノ枕ヲ與ヘテ眠ニ著シム。旅・人夢ニ帝・王トナリテ歡・樂ヲ極シニ、忽_チ太・子ヲ失ヒ后・妃ニ別_レ悲ニ沈_ム

ト見テ、夢サメヌ。其ノ眠タルヲ、纔ニ粟飯ヲ炊
 間ナリシト。沈、既・濟ガ枕・中・記ニ見エタ
 リ。是ヲ俗ニ邯鄲ノ枕ト云……田野に成てとハ、
 文・選古・詩ニ、古・墓ハ、塋テ爲シ田ト、松・栢ハ、摧テ
 爲ス新ト云ル形・容ナルベシ。

この注では、平泉の章の冒頭で、奥州藤原三代(清
 衡・基衡・秀衡)の繁栄が一睡の夢のようで、大門や
 秀衡の館が今は田野になってしまったが、金鶏山のみ
 が昔のままの姿を残していると語った場面で、「一睡
 の中にして」の典拠として沈既済の「枕中記」が、「田
 野になる」が『文選』『古詩』の詩句を挙げている。

まず、「一睡の中」であるが、注では、

中国において、富貴を願う旅人(盧生)に、呂洞
 濱が枕を与えて、眠りに就かせた、その旅人は夢
 の中で帝王になり、歓樂を極めたが、忽ち太子を
 失い后妃とも別れ、悲嘆に暮れて目が覚める。彼
 が眠っていたのは、わずかに粟飯が炊ける間で
 あったという話が沈既済の「枕中記」に見える。
 これを俗に、邯鄲の枕と言う。

と解説している。注の最後に示されるように、この話

は「枕中記」(著者の沈既済は、八世紀後半頃の人)
 に見えるもので、現在でも故事成語として著名な「邯
 鄲の枕」(一睡の夢・黄粱の夢とも)である。(3) 栄枯
 盛衰の典拠としては、ここでは一般的かつ妥当なもの
 であろう。「枕中記」では、夢を見た旅人(盧生)は、
 立身出世だけが人生の目標だったが、その信念に後悔
 を抱くという結末となるが、梨一は栄耀栄華に対する
 人間の欲望への反省を促す意味も込めたのではない
 か。ただ「枕中記」は引用書目には掲載されているが、
 単独の版本は未見である。(4)

次に「田野になる」であるが、出典として『文選』
 所収「古詩十九首」の第十四首の二句のみが挙げられ
 ている。(全句は次項に掲載されている) この二句は、
 長い年月が経過し、古い墓はいつか鋤きかえされ
 て田地となつていき、常緑をほこる墓上の松柏も
 伐りたおされ薪とされてしまうものだ。

という内容で、奥州藤原三代の栄華が果ててから五百
 年を経て、平泉が田野になった姿は、まさにこの詩の
 世界を彷彿とさせており、典拠としても十分説得力が
 ある。

この注は、『鈔』には採られていないが、『鼈頭本』では、

○一睡の中 中華ニテ富貴を願ふ旅人ニ呂洞賓力
一ツの枕を與へたる故事也

と『菅菰抄』の最初の部分採っている。

(四十二) 功名一時の叢クサムラとなる國破れて山河有城春に
して草青ミたりと

功・名ハ老・子ニ、功成リ名遂テ而身退クハ、天ノ之
道ナリト云語ヨリ出タリ。叢ハ玉篇ニ草生スル貌チト
ス。此文ハ詩ニ功・名土一・丘ト云意ナリ。國破
れて山河あり城春にして艸青ミたりとハ杜・甫春
・望ノ詩ニ、國破山・河在リ、城春ニ草木深シノ
句ヲ取テ青ミたりと換骨せし也。○按ルニ此段ハ
文・選古・詩ニ、去ル者ハ日ニ以テ疎シ、生ズル者ハ日
クニ以テ親シ、出テ郭・門一ニ直チニ視レバ、但ダ見ル丘ト
與レ墳、古・墓ハ犁ニ爲シ田ト、松・柏摧テ爲ス薪ト。
白・楊多ニ悲・風一、蕭・蕭愁ニ・殺ス人ヲ、思レ
還ニコヲ故・里ノ閭ニ、欲レ歸ニト道無シト云モノト
暗ニ頷・頷スルガ如シ。文ヲ嗜ム者ヨク心ヲ

付ベシ。

ここの注では、高館に籠もつて戦つた義経主従の
数々の功名は一時の夢で、今は草むらとなつており、
その光景を杜甫の五言律詩「春望」の首聯と重ね合わ
せた場面で、「功名」は『老子』を、「叢」は『玉篇』を、「功
名一時の叢となる」が詩「功・名土一・丘」の意味と
して、そして「國破れて山河有城春にして草青ミたり」
は杜甫の「春望」を引用して注解を試みている。

まず、「功名」であるが、梨一はこの語は『老子』
第九章の「功成リ名遂テ而身退クハ、天之道ナリ」から出
たと断言している。この文は「立派な功績を挙げて、
名声を得たなら、速やかに身を引くのが天の自然の摂
理である」という内容で、「功名」と「身退」がセツ
トで論じられている。とすると、梨一は功名を得た義
経主従は、身の退き方を誤つたので滅ぼされたのだと
暗示したとも取れる。

次に「叢」であるが、これは単に字義の解釈(草が
生えているさま)として、『玉篇』又部を挙げたに過
ぎないと思われる。

そして、この文が詩の「功名土一丘」の意味からなつ

ていると説明しているが、この詩は、「次剛中詩 又次其四」(明 成侃)

少日詩聲酷似侯 少き日の詩声は 侯に酷似し、
如今珥筆玉堂游 如今 筆を珥して 玉堂に遊ぶ。
平生不見生男好 平生見ず 男を生むを好しとする
を、

身後功名土一丘 身後の功名 土一丘。

の合句の下五文字を引用していると思われる。⁽⁵⁾ 男子としての功名など死後は土になってしまっただけで、意味がないと結んでいる。まさに「功名一時の叢」と同意ということになる。

さらに「國破れて山河あり城春にして艸青ミたり」であるが、これは今更説明するまでもなく、杜甫の「春望」の首聯を引用したことになるが、梨一は最後の「青ミたり」をこの首聯の換骨奪胎と解説している。「予」の見た眼前の平泉の風景は、杜甫の詩の春の「草木深」の気色ではなく、夏草が生い茂っており、それを芭蕉が「草」に焦点を当てさらに「青」という色で表現する「草青ミたり」にアレンジしたということになるだろう。杜甫の詩句を引用しつつも、現実の季節を織り

込もうとしたところが梨一の説く「換骨奪胎」と言えるのではないか。それが後の「夏草や兵どもが夢のあと」の句への布石となると考えられる。⁽⁶⁾

最後に○の後は、梨一がこの段全体を古詩十九首の第十四首(『文選』所収) 全句を挙げて、その詩の世界と暗に近似していると述べている。

この詩は、人口に膾炙されているが、

死するものは日々忘れ去られていくが、生を賜ったものは日に日に周りに親しく接せられるようになる。城門を出てまっすぐ見ると、大小の墓が目に入るだけ。古い墓は(長い時間が経過して)耕されて畑になり、周りの松や柏は切られて薪になっしまった。白楊には冷たく悲しげな風が吹き、その寂しげな音が人の心を切なくさせる。なつかしい村里に帰ろうにも、道が見つからず帰るすべがない。

という内容で、この詩全体が有為転変に彩られているが、平泉の章も、かつての藤原三代の栄光はあつく衰亡し、時間を経た今はその跡形だけが残る、まさに栄枯盛衰の現実をその共通点として示したのである。

この注は、『鈔』には、

城春^{ニシテ} 艸木深^シ 杜律 草青ミたりと轉せられて

古戦場の感情を余す坎

とあり、「草青ミたり」への改変を「古戦場の感情を余す」ために行つたかと疑問を呈する形を取っている。村径は「青」に「人生到處有青山」の「青山」(死に場所・墓場)の意味を込めようとしたかと思えたのかもしれない。

一方『鼈頭本』では、

○国破 杜甫^カ 詩草木深トアルヲ艸青ミたりと換骨し給ふならん

と『菅菰抄』の「艸青ミタリ」が「草木深」の換骨奪胎であることのみを示した。

(四十三) 岩手の里に泊る小黒崎ミづの小嶋を過てなるこの湯より尿前^{シト}の關にかゝりて封人^中の家を見かけて舍を求む

……封・人ハ周・禮^ニ 掌^下 設^ケ 王ノ之社・壇^一 爲^{シテ} 織・封^ラ 而樹^ル 之^ヲ。左・傳杜・預^ガ 註^ニ、典^ニ 封^一 疆^ヲ 者ト。封ハサカヒト訓ズ。封・人ハ境守^{モリ} ヲ云。

舍ハ左・傳^ニ、一宿^ヲ 曰^フ 舍^ト。一夜ドマリノナリ。

この注では、岩手(岩出)の里に泊まって、さらに小黒崎・美豆の小島などの歌枕を過ぎて鳴子温泉から尿前の関にさしかかり、そこは旅人もめつたに通らない所だったので、関守に怪しまれながらやつと関所を越え、封人の家を見かけて宿泊を頼んだ場面で、梨一は「封人」と「舍」の語釈に、『周礼』や『左伝』の用例を用いたのである。

まず「封人」の意味として、『周礼』地官封人の「封人とは王の社稷の祭壇を建設し、畿内の境界に壁を築き木を植えることを職務とする」の用例をあげ、さらに、『左伝』隱公元年の

穎考叔爲穎谷封人聞之有獻於公。

穎考叔は穎谷の封人爲り。之を聞きて、公に獻づること有り。(7)

の杜預の「封人」注「封人は国境を守る人」という例を挙げて、梨一は「封人」を国境守と解釈した。「封」の読み「サカヒ」は、『玉篇』土部に「サカヒ」とある。(8) また「舍」については、同じく『左伝』莊公三年の

用例を挙げて、「舍」を一泊の意味で解釈した。「予」は封人の家に宿りを求めたが、「三日風雨あれて、よしなき山中に逗留す」という結果になってしまったのである。その意味でも「舍」すなわち一泊が重要な意味を果たすのである。

この注は、『鈔』では、

封人ハ低き役人をいへるよし（頭注）論語註ニ
封人ハ掌^ル封疆^ヲ官 又莊子ニ麗之姫^ハ艾ノ封人之子
也^ト

とあり、封人を低い官職の役人と解釈し、用例として『菅菰抄』とは異なる『論語』や『莊子』を挙げている。⁽⁹⁾

一方『鼈頭本』では、

○封人 フウジン 境守を云 舍 ヤドリ 左傳
ニ一宿を舍と云

と用例としては「舍」の『左伝』のみ掲載している。

（四十四）究竟の若者

究、竟ハ、サカヒヲキワムト訓ズ。俗ノ至、極ト
云ニ同ジ。……按ルニ、今ノ俗健^カナルヲクツキ
ヤウト云。然レバ屈、強ノ字ヲ用^ユベシ。屈、強

ハツヨキヲカ^カムト訓ズ。不、敵ノ意ニテ、史、
記ニ、楊、信^ガ爲^リ人ト、剛直屈強ト云是也。

この注では、封人の家の主がこれから先険しい道が続くので、道案内人を頼んだ方がいいとのこと、頼んだところ「究竟の若者」が現われた場面、その「究竟」の語釈を試みている。

「究竟」は「サカイヲキワム」と訓読し、「至極」と同じ意味であるいが、ここでは「たくましいこと」を「クツキヨウ」と言っているのだから「屈強」という字を用いるべきだ、こちらの「屈強」は「ツヨキヲカガム」と訓読し「不敵」の意味であると示している。そしてその用例として、『史記』「匈奴列伝」の楊信の剛直で頑丈な人となり述べた箇所を引用している。

この注は、『鈔』には採られていないが、『鼈頭本』では、

○究竟 クツキヤウ 史記ニ屈強ト出 両説

とあり、『史記』に「屈強」とあるとのみ示し、「究竟」と「屈強」の「両説」があるとかかなり省略して示している。

(四十五) 高山森々として一鳥聲きかず木の下闇茂り
あひて夜る行がごとし雲端につちふる心地して中最
上の庄に出づ

森々とは、木の茂りたるさまなり。一鳥聲きかず
とハ、王・安・石ガ鍾・山ノ詩ニ、一・鳥不レ鳴カ
山更ニ幽ナリト云風・情ニテ、深・山ノ形・容ナリ
……雲端に土ふるハ、杜・甫詩ニ已ニ入テ風・磴ニ
霧ニ雲・端ニト云句ヲ取レリ。爾・雅ニ風アリテ而雨レ
土ヲ曰フ霧ト。旋・風ナドノ土ヲ卷上テ降スヲ云。

ここの注では、前項に引き続き「屈強の若者」の後
に付いて険しい山道を行った時の周りの景色を述べた
場面で、「一鳥聲きかず」と「雲端につちふる」の解
釈において、「王安石の鍾山の詩」と「杜甫の詩・『爾
雅』を引用して解説している。

まず「一鳥聲きかず」であるが、典故として「王安
石の鍾山の詩」の合句が挙げられている。ちなみに全
句を挙げてみる。

潤・水無レ聲繞レ竹流
竹・西花艸弄ニ春・柔一
茅・簷相・對坐終レ日

一・鳥不レ鳴山更ニ幽10

この詩は、王安石が自宅近くの鍾山と相對しながら、
茅葺きのあばら屋でのんびりとくつろいでいると、山
は鳥も鳴かずにひっそりしている様子を詠ったもので
ある。詩全体としては、「予」の体験した険しい山刀
伐峠越えとはほど遠い閑居な内容だが、合句だけ独立
して取り出せば、山刀伐峠の静寂な深山幽谷の情景を
十分描写できる詩句だと思われる。そのような詩句な
ので、梨一はその句のみを引用し、深山の形容として
風情が共通していると注解したのである。

次に「雲端に土ふる」の典故として、杜甫の七言
律詩「鄭・駙・馬潜・曜宅宴三洞・中ニ」（『杜律集解』
七言上）の六句目を挙げてみる。全句を挙げてみる。

主・家ノ陰・洞細ニ烟・霧一
留レ客ヲ夏簾青・琅・玕
春・酒杯・濃琥・珀薄ヲ
冰・漿盃・碧ニシテ瑪・瑙寒シ
誤テ・疑フ茅・堂ノ過ニ江麓ヲ
已ニ入ニ風磴ニ霧ニ雲・端ニ
自・是秦・樓壓ニス鄭・谷ニ

時^ニ聞^ク雜佩ノ聲ノ珊珊タルヲ (11)

この詩は、杜甫の親友鄭虔の甥で、玄宗皇帝の娘婿の鄭潜曜の邸宅での宴の様子を詠ったものである。邸内の洞穴での宴には、琥珀の盃に瑪瑙のお椀が並べられ、涼やかな風情を醸し出している。洞穴の近くの質素なお堂の当たりを通ると、そこはあたかも川に近い山麓を歩いているようだし、高き所に登り涼風を快く受ける石段の途中に立つと、遙か高い雲の端から細かい土ほこりが風に舞って雨のように降ってくる。まさに俗からは隔絶された世界である。

「予」は、深山幽谷の山刀伐峠越えの途中、吹く風に俗界では見られない幽遠な世界を感得した。芭蕉はその世界を、誇張表現ながらも「雲端につちふる心地して(遙か高い雲の端から細かい土ほこりが風に舞って雨のように降ってくる。まさに俗からは隔絶された世界)」と巧妙に描写したのである。その表現の背景に、梨一が引用した杜甫の詩「鄭・駙・馬潜・曜宅宴^ニ洞・中^ニ」の特に「已^ニ入^ニ風磴^ニ」^ニ「靈^ニ雲・端^ニ」^ニの「已^ニ入^ニ風磴^ニ」^ニ「靈^ニ雲・端^ニ」^ニが介在していた可能性は十分ある。

梨一が示したこれら二箇所の特典は断章取義では

あるが、注釈としての意義は十分果たされたとと言える。⁽¹²⁾

さらに「靈」の字解として『爾雅』釈天(風があつて土を雨が降るように上空から降らす)を引用して、⁽¹³⁾ 梨一自ら「旋風が土を巻き上げて降らす」と解釈している。

この注は、『鈔』では、

一鳥不^レ鳴山更^ニ幽^{ナリ} 宋ノ王荊公鍾山絶句ノ結句と

誤^テ疑^フ茅堂ノ過^ニ江麓^ヲ 已^ニ入^ニ風磴^ニ」^ニ「靈^ニ雲

端^ニ」^ニ 杜律

となっており、「鍾山の詩」は合句のみ、「雲端に土ふる」は「杜甫の詩」のを挙げているだけで、村径のコメントはない。

一方「鼈頭本」では「王安石の鍾山の詩」は取られていないが、「雲端に土ふる」の方は、

雲端につちふる 杜甫カ詩^ニ 已^ニ入^ニ風磴^ニ」^ニ 靈^ニ雲・端^ニ」^ニ 旋風などの土をふきまくるを云

とあり、『菅菰抄』と同じ箇所を引用し、意味も添え

ている。

(四十六) 此みち必不用の事有恙なうおくりまいらせて
 ……恙ハ爾・雅ニ憂ナリ也トス。恙ナクハ、サハリ
 ナクト云意ナリ○民・間ノ説ニ古^{ムカシ}・昔民ノ穴・居
 セシトキニ恙ト云蟲アリテ人ヲ害ス。故二人ノ
 安・否ヲ問ニツ、ガナシヤト云ト。按ルニ、是レ
 恙ト恙ト音通ナル故ニ、コレヲ混・誤シタル也。
 恙ハ獸ノ名ニテ、神・異・經ニ、北・方ニ有リ獸焉、
 其ノ狀^チ如^シ獅・子^ノ。食^フ人^ヲ吹^レバ人^ヲ則病^ム。名^ケテ
 曰^フ恙。恒^ニ近^ツ人ノ村・里ニ、入^ル人ノ居・室ニ、
 百・姓患・苦ス。天・帝徙^ス之^ヲ東・方荒・中ニト
 云、是ナリ。今民・俗ノ所謂^ルモノハ正・字・通
 ニ風・俗・通ヲ引テ、以^テ恙^ヲ爲^ス二噬^ム人^ノ蟲^ト。善^ク
 食^フ人心^ヲトアリ。或ハ此説ヨリ出ルカ。然ドモ
 正字通ニ云モノハ、唯^ダ恙ヲ通ジテ恙ニ作ルノミ。
 恙ノ字ノ本義ヲ解スルニ非ズ。

ここの注では、「予」が必死の思いで「山刀伐峠」
 を越えて、最上の莊に辿りついたところで、道案内
 の者が無事だったことに安堵と感謝の念を述べた場
 面で、「恙なく」の語釈、さらに「恙」について「恙」
 の文字との相違を明らかにするため、『爾雅』や『神

異經』・『正字通』を引用して字解を述べている。

まず『爾雅』であるが、同書の「釈詁」にある「恙憂也」
 を引用し、梨一は「恙」はそれ自体「憂える」という
 意味があり、「恙なく」を「障りなく」と解釈した。

次に『神異經』中荒經であるが、民間伝説にある「民
 が穴居した折に、恙という虫が人を害したので、そこ
 から人の安否を尋ねるときにつつがなしやと言うよう
 になった」ことに対し、梨一はこの伝説は「恙」と「恙」
 が音通なので混用しているとし、「恙」は獸なので同
 書の獸としての用例を引用した。その部分は、

北方に獅子のような獸がいて、人に噛みつき人に
 息を吹きかけると、人は病に陥る。その獸は「恙」
 と名付けられた。いつも村里に近づき、部屋に入
 り込むので、人々は悩まされた。そこで天帝は「恙」
 を東方の荒中に移した。

という内容で、「恙」は人に近づき害を及ぼし、病に
 到らしむものとして恐れられていたのである。

さらに「恙なし」を「恙虫が人を害するので、それ
 の害がなく無事である」という意味に用いるのは、『正
 字通』に引用する『風俗通』の「恙は人を噛む虫で、

よく人の心を食う」というところに由来するかと提言しているが、⁽⁴⁾これは「獐」を「恙」と通用させただけであると断定し、「恙」の本義を解説しているわけではないと結んだ。

○以降の注は、「恙」が「獐」(獅子のごとき獣)と混用されたことを『神異経』や『正字通』に引用する『風俗通』を挙げて叙述しただけで、あくまで参考の域を出ていないと思われる。

この注は、『鈔』では採られていないが、『鼈頭本』では、

○恙ツ、ガ さはりなくと云意也 一説いにしへ人穴居せし時恙と云蟲有て人を害すと 恙と獐ト通音なる故混誤したる也 又獐ト云獸ありて人を喰フト神異経ニ出タリ

とあり、恙の字義、恙と獐の混誤、神異経の用例を挙げ、『菅菰抄』の注を要約する形で示している。

(四十七) 松栢年舊

栢ハ栢ノ俗字ニテ、今ノ俗栢ヲカシフト訓ズル中、華ノハ尤誤ナリ猶下ニシルス 栢ハ、種類多シ。本・草綱・目ニ詳ナリ。日本ニテハ櫨ノ一也ト

モ或ハアスナラフノ木ナリトモ云テイマダ決セズ 一説ニ栢ノ字ヲ又カヤト訓ズルハ誤ナリ。カエト訓ズベシ。乃栢ノ和訓也……カヤハカヤリ木ノ略ニテ、櫨ノ字ヲ用ユ。此木ヲ蚊ヤリトスル故ナリト云。

ここでの注は、閑寂な立石寺の情景を述べた「松栢年旧(松や栢も年数を経て)」の「栢」の字解を日中の違いを示しながら解説している。

まず、「栢」は日本では「かしわ」と訓じているが、それが誤りであるとし、「櫨」或いは「翌櫨」に相当するが、どちらなのかは決定できない。また「栢」を「カヤ」と訓じているのも誤りで、「カエ」(カエヌ木の略)と訓ずるべきであり(栢の和訓)、櫨の字を当てるべきであると示した。『本草綱目』の名が示されているが、卷三十四の「木部」では、

栢葉ハ松身ハ者櫨⁽¹⁵⁾

とあり、栢が松や櫨に類するものであることがわかる。ここでは、梨一は「松栢」は「松や櫨或いは翌櫨或いは榧」と解すべきであると言及したかったのであろう。

この注は、『鈔』では採られていないが、『鼈頭本』

では、

○松栢 栢ノ説多シ今云かしはの木ニ非ず

と簡潔に「栢」が今の「カシワ」ではないことを示している。

(四十八) 谷の傍に鍛冶小屋と云有^中彼龍泉に剣を淬^ニすとかや干將莫耶のむかしをしたふ道に堪能の執あさからぬ事しられたり

……龍泉に剣を淬とハ、史・記荀・卿傳ノ注ニ、

晉ノ太・康ノ地・理・記ニ云、汝・南ノ西・平・縣ニ

有^ニ龍・淵・水ニ可^三用^テ淬^ニス刀・劔ヲトアリ。淬ハ

俗ニ云、水ギタヒノヲナリ。干・將莫・耶ハ古^エ

鍛・冶ノ名・工ノ名、呉・越・春・秋ニ云、干・

將ハ呉・人ナリ也。與ニ歐・冶・子一同メ師ヲ。闔・

閭使^ム造^ラニ劍ヲ。一ヲ曰^ニ干・將ト、ニヲ曰^ニ莫・耶ト。

莫・耶ハ者干・將ガ妻ナリ也。金・鐵未^ダズ流レ。

干・將夫・妻、乃チ斷^レ髮^ヲ剪^テ指^ヲ、投^ス於^ニ爐・中ニ。

乃チ濡^フ、遂ニ爲^ル劍ヲ。陽ハ干・將作^シ龜・文ヲ、陰ハ

莫・耶作^ス縷・理^ヲ。干・將匿^シ其ノ・陽^ヲ出^レシテ陰^ヲ

以^テ獻^ス闔・閭ニ。太・平・廣・記ニ云、干・將莫

・耶^ガ劔ハ皆^ハナ以^テ銅^ヲ鑄^ル之^ヲ、非^ズ鐵ニ也ト云……

ここでの注は、月山から湯殿山へ下る途中の鍛冶古屋にまつわる逸話(出羽国の名工が霊水を選んで、この地に籠もって潔斎し剣を打ち「月山」という銘を刻んで世にもてはやされた)に対し、中国の龍泉の水に剣を鍛えたという話(干將・莫耶の昔を慕う)に匹敵するとし、一道に秀でた達人の執心の深いことを痛感させられると結んだ場面で、「龍泉に剣を淬」と「干將・莫耶」の典拠として、『史記』荀卿伝の注や『呉越春秋』『太平広記』を示した。

まず、「龍泉に剣を淬」の『史記』荀卿伝の注であるが、この注は江戸時代に我が国でよく読まれた『史記評林』に示されたもので、「荀卿の生まれた趙には堅白論を唱えた公孫竜もいる」という部分の注で、梨一が引用した『晉太康地理記(地記)』を引き「堅白論」の「堅」の例えとして「龍泉の剣」が示されている。⁽¹⁶⁾

なお「淬」は本文では「ニブズ」と読みが付してあるが、『史記評林』では「ニブラス」となっている。「淬」の読みとしては、野坡本および曽良本では「ニラグ」

と振り仮名が振ってあり、『鈔』でも「ニラグ」と読んでいる。とすると梨一は『史記評林』の読みを参考にして「ニブス」と呼んでいた可能性もある。そして彼は「淬」を一般に用いられている「水ギタへ」のこととしているが、ここでの意味としては、「焼いて水に入れ、鉄の質を硬くする。焼きを入れる」(『日本国語大辞典第二版』)となるであろう。

次に「干将・莫耶」の意味として「古の鍛冶の名工の名」とし、まず『呉越春秋』が引かれている。この内容は、

干将は、呉人であり、欧冶子と師を同じくした。闔閭は剣匠に二本の剣を作らせ、一本は干将といひ、二本目は莫耶といった。莫耶は干将の妻であった。金鉄のもとと溶けて流れなかった。干将夫妻は髪を切り爪を切つて爐の中に投じた。すると金鉄がうるおってきたので、そのまま剣を作った。陽を干将といい、陰を莫耶と言った。陽は亀甲の文様、陰はちらばったすじ模様があった。干将はその陽をかくし、陰を出してこれを献じた。

というもののだが、梨一は『呉越春秋』「闔閭内伝」の

本文をかなり簡潔に引用している。

『呉越春秋』は引用書目にもあるが、この部分は、『機活法』詩学全書卷第十六器用門「剣」の「干将莫邪」の項にも、

呉越春秋ニ曰干・将、将者呉・人也。与ニ歐・冶・子一同セリ師ヲ。闔閭使^レ造^ニ二剣一。一ヲ曰^レ干・将。二ヲ曰^レ莫・邪。莫・邪者干・将カ之妻也。金・鉄未^レ流^レ。干・将夫・妻。乃^シ断^レ髪ヲ剪^レ指ヲ。投^ニ於^一炉・中ニ。乃^テ濡^テ遂^ニ成^レ剣ヲ。陽^ハ干・将作^ニス亀・文ヲ。陰^ハ莫・邪作^レ縷・理ヲ。干・将匿^ニ其^一、陽^ヲ出^{シテ}陰ヲ以^テ献^ニ闔閭一。(17)

と全く同じ箇所が引用されており、梨一はこちらを参照していた可能性が高い。(18)

また『太平広記』「器玩三」の方は、引用されているのは「干将・莫耶の剣は、鉄ではなく銅で铸たものである」という内容で、この二本の剣が銅製であったとあるが、単に呉の闔閭の時代(春秋時代)にはまだ銅剣が主流で鉄剣はなかったということを示しているのだろうか。

この注は、『鈔』では、

字彙ニ前漢天文志ニ火与レ水合^{スル}為^ニレ。滓^ニ吳越春秋
 ニ云楚王召^テ風湖子^ヲ而告^レ之^ニ曰寡人聞^ク吳^ニ有^ニ干
 將^一越有^ニ歐治^一寡人欲^ス因^レ子^ニ請^{シテ}此^ニ二人^ヲ作^上レ
 劔^ヲ可^{ナラン}乎風湖子乃^チ往^テ見^ニ二子^ニ令^{シム}作^レ之^ヲ
 一^ヲ曰^ニ竜泉^一二^ヲ曰^ニ大阿^一と

と「滓」の字解として『字彙』を、「干將・莫耶」の
 典拠としては『菅菰抄』と同様『吳越春秋』を挙げて
 いるが、内容が『吳越春秋』とは一致していない。た
 だ同様の内容の話は『事文類聚』にある。(19)

一方『鼈頭本』は、

○龍泉 リウセン 南ノ西平縣ニ龍淵有^ト

○劔アラカ子ヲ 滓ヒヤストかや

○太平廣記ニ云 干將莫耶力劔ハ以銅鑄之ト云
 と、簡単な語釈のみを挙げているが、「干將莫耶」に
 ついては、『菅菰抄』の注に引く『太平広記』のみを
 引用している。

(四十九) 雨朦朧として鳥海の山かくる闇中に莫作し
 て雨も又奇也とせば雨後の晴色又頼母敷と蟹の苦屋
 膝をいれて

雨朦朧としてとは、詩ニ樓・閣朦・朧^{タリ}細・雨ノ
 中^ニト云風・情ニテ、朦・朧ハ圓・機活・法^ニ日
 未^ダザル^レ明^カ也ト云。物ノヲボロニ見^{ユル}ル^ヲナリ……
 闇・中に莫・作してとハ、按ルニ、莫・作ハ摹・
 捺ノ誤ナルベシ。通^{シテ}摹^ニ索^ニ作^ル世・説新・語・補^ニ、暗
 ・中ニ摹・索^{シテ}亦^タ可^シ識^ルトアリ。卑・俗ノクラ
 ガリニテ、サグツテ見^テモ知^ルルト云^フナリ。此^コ
 ニテハ、唯^ダ闇・中ニ坐^{シテ}、ソコヲアタリノ知^レ
 カヌル形・容ト見^ルベシ。雨も又奇也とせば、雨
 後の晴色又たのもしとハ、東・坡^ガ西・湖^ノ詩ニ
 水・光激・灩^{トメ}晴^レ偏^ニ好^シ、山・色空・濛^メ雨^モ
 又^タ奇・欲^下ハ把^テ二西・湖^一比^{セント}西子^ニ、淡・粧濃
 ・抹也^タ相^ヒ宜^{シト}此^ノ詩ヲ取^ルルナリ。此^ノ詩ハ是^レ
 本朝ニテハ、必^ズ象潟ノ形・容ナルベシ。故ニ祖
 ・翁モ亦象潟眺・望ノ吟ニ、西・施ガ睡^ル容ヲ
 云ントテ、先^ツ僅^ニ其^ノ意ヲ起ス。是^レ漢・文ニモ
 貴^フ所ニテ、文・書ニモ此・法アリ。亦^タ吾^ガ翁ノ
 文ニ、奇中ノ妙ナルモノナリ……膝をいる、ハ、
 陶潛^ガ歸去來ノ辭ニ、審^ニ容^ルノ膝^ヲ之^ノ易^キ安^{シト}云
 文ヲ取^ル也。

ここでの注は、予が象潟に到着した時に雨の中鳥海山も暗く隠れてしまっているが、それもまた素晴らしく雨上がりの気色も期待しつつ、漁師の粗末な家に宿をとつてゐる場面で「雨朦朧」・「闇中に莫作して」・「雨も又奇也とせば、雨後の晴色またたのものし」「膝をいゝ」の典拠として詩や『円機活法』・『世説新語補』・蘇軾の「西湖」詩・陶淵明の「帰去来辞」を引いてそれぞれの解説を試みている。

まず、「雨朦朧」であるが、最初の「詩二樓・闇朦朧^{タリ}細・雨ノ中」は、ここでは「詩二」としか示されていないが、韓偓の七言絶句「夜深」の合句に同様の句がある。全句を示すと、

惻惻輕寒剪剪風 惻々たる輕寒 剪々たる風
小梅飄雪杏花紅 小梅は雪を飄へし 杏花は紅なり
夜深斜搭鞦韆索 夜深 斜に搭る鞦韆の索
樓閣朦朧細雨中 樓閣 朦朧タリ 細雨の中²⁰

となり、薄ら寒い風が吹いて。小梅や杏の花が咲き、夜更けには斜めにかかったぶらんこの綱や樓閣はおぼろげに霧雨の中に見えるという情景で、梨一はその合句に示された風情が雨に煙って隠れてしまった鳥海山

の気色と重なっていると取ったのであろう。ただ予が歩いた道すがらに樓閣が存在したかは不明である。その後に挙げてある「日未^ダザル^レ明^カ也」であるが、これは『円機活法』韻学 東の「朦」の解説を引用したもので、「まだ夜が明けず暗い」という意味。これらから梨一は「朦朧」は「物がおぼろげに見えること」と解釈したのである。

次に「闇中に莫作して」であるが、梨一はまず「莫作」を「摹搦(摹索)」の誤りとし、その用例として、『世説新語補』卷十七簡傲「許敬宗」の一文を挙げた。この話は、

許敬宗が人に会つてもそのことをすぐに忘れてしまふので、ある人から、「あなたは覚えておくとが難しいかもしれないが、もし何遜や孝綽・沈約・謝眺に会つたなら、暗中に模索してでも覚えておくことができるよ」言われた。⁽²¹⁾

という内容である。これを踏まえて、梨一は「暗中模索は俗に言う、暗がりにて探つてみても認識できるということであるが、ここ(おくのはそ道)では、ただ暗闇に座っているだけでは、そこから辺りがはつきりと

認識しにくいという形容として見るべきであると解釈したのである。

さらに「雨も又奇也とせば、雨後の晴色又たのものし」であるが、この典故として、蘇軾の七言絶句「西湖」を全句挙げている。この詩は西湖と絶世の美女西施を比較対照したもので、特に西湖の気色は晴れの日も雨の日も素晴らしく、その姿が西施の薄化粧と厚化粧に匹敵するとの詩情である。そして梨一はこの詩は「我が国では象潟の形容であり、芭蕉翁も象潟の眺望に西施が眠る姿を言わんとして（「象潟や雨に西施がねぶの花」の句のことか）、まずその意図を示した。これは漢文において尊重される手法で、文書にも取り入れられ、芭蕉翁の俳文の奇中の妙と同じである」と解説した。ただこの解説はむしろ「象潟や」の句のところにおいてなされるべき内容であろう。

最後に「膝をいる、」であるが、ここでは陶淵明の「帰去来辞」の「審容^ス膝^ヲ之易^キ安^シ」の部分（22）を挙げて説明している。この場面は、生活のために仕官したものが自分に合わず職を辞して隠居した折の、粗末ながら快適な我が家での喜び「膝を折って

入るほどの狭い家でも、安住の場であることが明確になったこと」を綴ったところであり、「予」が雨中の象潟で狭いながらも獵師の小屋で安住できることの喜びに通じるものとして、梨一はこの句を挙げたのである。

これらの注は、『鈔』ではそれぞれ、

彙ニ膝^ハ莫紅ノ切音蒙膝^ハ月將ニ入^{ント}龍^ハ廬容ノ切音竜 韓昌黎詩云星月掩映^{シテ}雲膝^ハ……

（頭注 莫作ハ本文ノ写誤歟 闇中ニ摸索ト世説ニ出^ルと）

東坡西湖ノ詩ニ山・色空・濛雨モ亦奇^也

帰去来ノ辞審^{ニス}容^ル膝^ヲ之易^キコトヲ安^シ 陶淵明

文選李善注ニ北郭先生カ妻ノ曰所ハ安^{スル}不^レ過^キ容^ル、コト膝^ヲ

となっており、一部『菅菰抄』とは異なった出典を挙げている。一方『鼈頭本』は、

○摹搢 マクサ 世説^ニ出

○雨も又奇也ト 東坡カ詩の句

○アモノ管家ニヒザを入るの文帰去来辞ニ出たり
となっており、それぞれ簡潔に漢籍の出典を示してい

るのみである。

(五十) 此寺の方丈に坐して簾を捲バ

……簾を捲バとは、王・勃^ガ滕・王・閣ノ詩ニ、朱
・簾暮ニ捲^ク西・山ノ雨ト云ル形・容ナリ

ここでの注は、象潟の「干満珠寺」を尋ねて、その
表座敷に座って簾を巻き上げて眺めると、象潟の風景
が一望できた場面で、「簾を捲バ」の典拠として王勃
の七言古詩「滕王閣」の一句を引用している。⁽²³⁾

その一句は、滕王閣は夕暮れに朱塗りの簾を巻き上
げると、西山の雨が眺められるという詩意であるが、
梨一は雨の「干満珠寺」での眺めが、まさにこの滕王
閣からの雨の眺めに通ずるものがあるだろうと見なし
たのである。

この注は、『鈔』では採られていないが、『鼈頭本』
では、

○簾 レン スダレ 詩ニ多

と「簾」の音訓の読みを挙げ、詩にはよく用いられる
と結んでいるだけで、滕王閣の詩は採っていない。

(以下続く)

【注】

(1) 延享四年刊『趙註孟子』(国書データベース)に
よる。

(2) 拙著『芭蕉俳諧に表現された漢詩文の研究』(お
うふう 平成三十一年) 二百九十一頁～二百九十
二頁参照。

(3) 『野語述説』・『漢語大和故事』などでは「邯鄲の
枕」として立項されている。

(4) 「枕中記」は『太平広記』や『文苑栄華』には所
収されるが、単独のものは、国書データベースに
よれば、写本は掲載されているが版本類は見られ
ない。梨一がいかなる「枕中記」を見ていたかは
不明である。

(5) 梨一がこの詩を何で見えていたかは不明、或いは
辞書などに一部引用されているのかもしれない
が、今回は管見の範囲では探し当てられなかった。

(6) 注2と同様。百八十三頁～百九十八頁・二百九
十四頁～二百九十六頁参照。

(7) 安永六年刊『春秋左伝集解』(国書データベース)
による。

- (8) 享保二十年刊『増続大広益会玉篇大全』(国書データベース)による。
- (9) 注2と同様。二百九十六頁～二百九十八頁参照。
- (10) 天和二年刊『錦繡段』雑賦(影印仮名つき錦繡段・三體詩・古文真寶)クレス出版 平成四年所収)による。『錦繡段』は引用書目にある。なおこの合句は『禪林句集』七言・『詩人玉屑』巻八沿襲にも所収されているが、いずれも引用書目には挙げられていない。
- (11) 元禄九年刊『鼈頭杜律集解』(架蔵本)による。
- (12) 注2と同様。二百九十九頁～三百一頁参照。なお尾形仿『おくのほそ道評釈』(角川書店 平成十三年)では、芭蕉は深山に陰風の吹きわたる感じを、「雲端につちふる」とはかくもあらんかと、なぜうえたのである。
- (13) 寛政六年刊『爾雅注疏』(早稲田大学図書館古典籍総合データベース)による。
- (14) 『正字通』の該当箇所は管見の範囲では見当たらない。ちなみに『書言字考節用集』(言辭 八下)の「無恙」の項では、「風俗通」の、
恙^ハ毒虫也。喜^テ傷^ル人ヲ。古^ハ者草・居露・宿ス。
多被^ニ此毒^ニ。故相^ニ勞^ヒ問^テ謂^ニ一^レレー乎^ト。
を引用している。(改訂新版書言字考節用集研究並びに索引) 勉誠出版 平成十八年による)
- (15) 正徳四年刊『本草綱目』(国立公文書館デジタルアーカイブ)による。
- (16) 延宝二年刊『史記評林』(国書データベース)による。
- (17) 寛文十三年刊『円機活法』(架蔵本)による。以下同様。
- (18) 注2と同様、三百七頁～三百一十一頁参照。
- (19) 注18と同じ。
- (20) 文化七年刊『香奩集』(国書データベース)によるが、この書物は引用書目にはなく、梨一が見ていた可能性は低いと思われる。ただ管見の範囲では『円機活法』などの辞書類にも見えず、出典は不明である。
- (21) 元禄七年刊『世説新語補』(架蔵本)による。

(22) 「帰去来辞」は『古文真宝後集』に所収されており、梨一はそれによったものと思われる。

(23) この詩は『唐詩選』の七言古詩に所収されており、梨一は引用書目にもある同書を出典としていたと思われる。